

次の世代に課題を持ち越さないために ―「幸せな分断」を乗り越える―

対談

佐久間洋司

「大阪大学グローバルイニシアティブ機構招へい研究員」

岡田直樹

「大阪ガス株式会社エネルギー文化研究所研究員」



1990年代後半から2010年代前半に生まれたZ世代。生まれた時からインターネットが存在するデジタルネイティブとされる若い世代にとって、今まさに進展するデジタル社会はどのように映っているのか？ Z世代を代表する新進気鋭の研究者である佐久間洋司氏に、昭和世代の岡田直樹研究員が迫った本対談。デジタル社会における問題点や課題解決の道筋まで、世代を超えて幅広い議論が展開された。



加藤しのぶ＝構成 宮村政徳＝撮影

科学技術による「人類の調和」 ―ムーンショット型研究開発事業について―

岡田 まず佐久間さんがチームリーダーとなっていて組み立てられている研究内容についてお聞かせください。

佐久間 まずムーンショット型研究開発事業から説明しますと、超高齢化社会や地球温暖化問題など、今後我々が直面する重要な社会課題を解消するために、単なる従来技術の延長にはな

い、大胆で挑戦的な研究開発を推進しようとする、内閣府が主導する事業です。これまでに7つの開発目標が設定されていたのですが、アフターコロナの社会情勢を見据える中で新しい目標を検討しなければいけないということことで、2020年に「ミレニア・プログラム」が新たに設置されて、その中で我々のチームが採択されました。

岡田 採択された中では、佐久間さんのチームが最も若手なのですね。

佐久間 そうです。みな私と近い年齢で、もしかすると2100年まで生きようという世代。顔ぶれも研究者に経営者、司法修習生、現代美術家、SF小説の編集者と多彩です。こうしたメンバーで取り組んでいるのが「人類の調和」を目指すための研究なのです。

岡田 「人類の調和」とはどのようなことなのでしょう？

佐久間 「2050年までに、誰もが自律的な個人としての幸福を感じながらも、人類という

集団としても調和に満ちた社会を実現する」というのが私たちの掲げる目標です。簡単に言いますと、個人と集団の双方の幸福が両立している状態を目指そうというもので、それを「人類の調和」と捉えています。

このテーマを設定した背景には、「分断」の問題があります。政治的分極化、経済的な不平等、そしてSNSにおける誹謗中傷といったレ

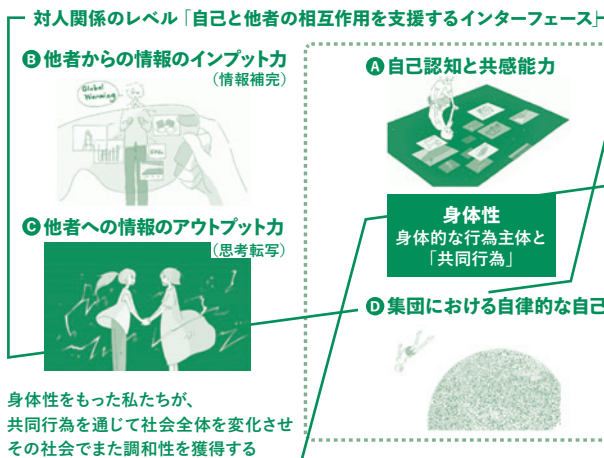
ベルまで、現代社会はさまざまな分断を問題として抱えています。そしてコロナ禍は、それらの問題を顕在化させました。そうした分断を根本的に解消するための道筋を考えようというのが私たちの研究なのです。

岡田 「個人」と「集団」、二つのレベルで幸福を目指そうというんですね。

佐久間 その通りです。私たちは「対人関係の



図2：達成シーンとターゲット



出典／科学技術による「人類の調和」検討チーム

2050年に社会像を 目指す科学技術の方向性

岡田 では、この二つのレベルの達成シーンを実現するための科学技術とはどのようなものなのでしょう？

佐久間 具体的には六つの技術の方向性があります(図2)。このうち、A～Cは対人関係のレベルにおける「自己と他者の相互作用を支援するインターフェース」です。それぞれ使う技術や方向性は変わりますが、他者の視点や考え方を理解したり、相手に複雑な思考や感情を伝えるために、それを支援するようなインターフェースです。たとえば私がお話していることには、本来情報の背景や文脈がありますよね。そういったものを含めた概念を瞬時に翻訳して、スマートグラスなどに映し出してくれるような技術です。

続いてD～Fは、集団のレベルにおける「集

図1：ムーンショット(MS)目標案と達成シーン

Proposed MS Goal title (MS目標案の名称)：
「2050年までに、誰もが自律的な個人としての幸福を感じながらも、人類という集団としても調和に満ちた社会を実現」

誰もが個人としての幸福を追求できる機会や権利が担保されながらも、人類という大きな集団としても調和的な振る舞いが可能になるという社会の実現のため、対人関係のレベルと集団のレベルについて、二つの達成シーンを設定する。

対人関係のレベル 「自己と他者の相互作用を支援するインターフェース」

2050年までに、私たちは自己を認知・更新しながら、自己と他者との間で思考や感情を深く相互理解することができるようになる。

集団のレベル 「集団の多様性ある自己組織化を支援するシステム」

2050年までに、私たちは集団のなかで自律的な自己を保ちながらも、多様性ある融和と価値観の共創をすることができるようになる。

出典／科学技術による「人類の調和」検討チーム

団の多様性ある自己組織化を支援するシステム」です。集団の中で話し合いをする際に、一人ひとりが納得して受け入れられる、声が大きいい人の意見だけでなく小さい人の意見も汲み取り最適化する合意形成システムや、色々な人の意見や考え方を、効率よくかつ偏見のないように理解することができると情報伝播システムなどを想定しています。

この二つのレベルの技術に対して、これらを活用するのは身体性をもった私たち自身です。私たちが社会全体を変化させ、技術を繰り返し使うことで調和性を獲得できるということが言えると思います。もちろん、こうした技術も単なる絵空事ではなくて、今ある技術の延長上で実現可能なものなんです。

岡田 面白そうではありますけど、なかなかイメージをするのが難しいですね(笑)。

佐久間 なかなか簡単に説明できないのは、私としてもどこかしらとこです。でも、そうしたイメージを伝えるために、SFの得意なカシワイさんにイラストにしていたいたり、社会像をSF小説として表現いただいたりといった試みもしています。書き手も柴田勝家さん、津久井五月さんという新進気鋭の若手SF作家で、目指すべき2050年の社会がどのようなものになるか、ストーリーとして捉える試みです。そうしたストーリーを構想する中で、新たな課題や必要な技術が明らかになるということもあるのです。

ば、それを「幸せ」と呼んでもいいのかもしれませんが。確かにそれも幸せのあり方の一つなのかもしれません。でも私は、異なる価値観をもった人とも共に存在し、多様性を担保しながら交流できる社会であるべきと考えています。みんなが可能な限り「私たち」という一つの人類の多様性をもって、それでいて「私自身」も自律的にある、そこを往復できることを目指そうというのが、私の考えなんです。

岡田 なるほど。「幸せな分断」に安住するのではなく、多様な価値観が刺激し合う社会の中で、自らの存在を噛みしめることができるように、さまざまなアシスト機能を社会で整備できるといいですね。

今の説明も含め、佐久間さんはまず問題意識から始まって、そこからそれを解決するための方策を話しておられます。そこにいたるまでに浮かび上がってくる問題点とも一つひとつ丁寧に向き合っておられるのだなと感じました。

目の前にある課題は 今の世代が解決したい

岡田 以前、私が参加した有識者会議で、佐久間さんは、自分たちの世代の多くはTwitterなどのSNSで複数のアカウントをもっていて、それぞれのアカウントを使い分けている、と話されていました。それがとても印象に残っています。我々昭和世代の人間は、自分はこうであるという一つの人格以外をもつことはないよう

ほかに、この研究は科学技術分野の開発だけでなく、それと対になる人間の心理や社会性に関する人文社会科学分野の研究も必要になってくるため、さまざまな研究分野の学識者、有識者100人に対してヒアリングも行ってきます。専門家との議論を通して常に情報をアップデート、整理しながら、現在の構想をつくりあげてきたのです。

岡田 これまで佐久間さんがヒアリングされてきた100人の方々のお名前や経歴を拝見すると、錚々たるメンバーですね。分野を横断して叡智が交流する、まるで佐久間さん主催の学術会議が行われているような贅沢さと感じました。

また、構想する社会像をSF小説化するというのは面白い試みですね。こういうことへの関心が薄い人も身構えずに考えられるので、社会を動かす一つの仕掛けともなる予感さえします。また、幅広い分野の識者の知見も加わっているとなると、厚みのあるものになっているのではないのでしょうか。

フィルターバブルによる 分断を乗り越えるには

岡田 集団のレベルにおける支援システムの説明で、人々の多様な意見を偏見なく取り入れることを目的にしているとお話しされました。これはフィルターバブルの問題を念頭に置かれているのかと思います。今の社会は、推薦システムによって、似た情報や視点に囲まれてしま

に思いますが、佐久間さん世代の人は、複数のアカウントに、複数の自分がいるように思います。それは、もしかすると複数の価値観をもっていることで、常に自分を客観視することができるのではないか。一つの世界に依存してしまいうのではなく、ふと我に返ることができると思いうんです。それならばフィルターバブルの影響を受けにくいのではと思うのですが、それについてはどうお考えですか。

佐久間 確かに我々世代の人間は複数のペルソナをもっている人が多いです。アカウントを分けることでそれぞれに違う情報が届くような現象は私も実際に体験していますし、2個3個とアカウントがある方がいいのは間違いないと思います。

ただ、複数のアカウントをもったところで、現状は推薦システムから逃れられず、結局は自分の価値観を反映したものを増強するに過ぎない部分もありますから、フィルターバブルの影響がないかという点、そうではないのが難しいところ。たとえば、自分がもたないであろう情報源に接するようなアカウントをサブアカウントとして提案してもたせてくれたりするといいのかもしれない。

岡田 実は、今号の巻頭インタビューで鈴木謙介先生に取材した際、若い人たちは推薦システムによりつくられる環境に違和感はないということを抑っていて、もう若い人たちは乗り越えてしまっているのではないかという気がしてい

フィルターバブルという状態が起きやすい。さらにこれが先鋭化して、自分と近い考えの意見ばかりが届いてしまうことで、より一層偏った価値観が強化されてしまうエコーチェンバー現象にも陥ってしまう。これらが、デジタル社会の問題だと私は思っています。佐久間さんもそのように考えているのでしょうか。

佐久間 そうですね。フィルターバブルによって分断がもたらされているということが大きな問題だと思っています。同一の意見しか受け入れられなければ、多様性が担保されず、集団における合意形成が困難になるからです。それを克服するため、情報流通の制御の技術やマッチングの技術、合意形成に至らなかった場合の歩み寄りを支援する技術、また悪意のある情報を遮断する技術など、フィルターバブルに陥らない技術を深化させる必要があると思っています。

しかし、一方でこのフィルターバブルによる分断は、ある意味で「幸せな分断」といえるのかもしれませんが。そもそも問題解決すべきなのかどうかという検討から始めなければならないかもしれません。

岡田 「幸せな分断」とは何でしょうか？

佐久間 たとえば、村のような社会に戻って、自分が好きな人とだけ暮らせるという世界があれば、それもいい気がするじゃないですか。同じ価値観の人に囲まれて生きるという考え方を支持する人も多いかもしれませんが、分断がその人にとってより良い状態を実現するのであれ

たんです。佐久間さんの仰るように、影響がないというわけではないのならば、若い人たちにその危険性を訴えていく必要はありますね。

訴えるといえば、もう一つ、言いたいことがあります。私の子どもは社会人になったばかりの年齢ですが、何を決めるにもまずインターネットで検索するんですね。親や周囲の人間に相談することなく、自分で調べた範囲だけで満足してしまっている。親としては自分の失敗を含めたこれまでの経験で得たものを子どもに伝えたいのに、その機会すらくれない。もつと子どもに関わりたいのに関わらせてくれない。その寂しさもあって、何でもかんでもインターネットに依存しているんじゃない、と言ってやりたくなるんです(笑)。スマホを手放しなさいと親が言うべきだとも思うのですよ。

佐久間 親子間のコミュニケーションのあり方も関係するのではないかと思うので…私からはあまり多くのことは言えませんが(笑)。それに、インターネットの遮断を強制するという方法も、実際にやるとなると難しいかもしれません。ただ、インターネットでの検索方法については気になることはありますね。私より若い世代は最初にYouTubeで調べる人が増えていると聞いています。Googleなどと比べて、情報源となる素材がまだまだ圧倒的に少ない検索先では、一面的な情報しか入らないという問題はあると思います。

岡田 私から見ると少ししか年齢差がないのに、

それぞれの世代の価値観の違いを見極めたうえで問題と思われる部分への危機意識を感じておられるわけですね。そもそも、私は推薦システム自体にも疑問を感じています。Amazonがおすすめしてくる本ばかりを買っていてそれでいいのかと。本を選ぶ時に私は本屋へ足を運び、欲しい本のある書棚以外も見ながら、じっくり選びたい。そうすることでいつも思わぬ発見がありますから。また、花屋で贈り物の花を選ぶのもどれでもいいというわけではありませんよね。相手のこと、どういう思いで贈るのかを考えながら吟味するわけです。そういう、一つのものを選び取るために苦労というプロセスを経ることに大きな意味があると私は思うのです。

そういったプロセスを経た作業と、ただおすすめしてくる本を深く考えずに選んでしまうのでは、重みが違うように思ってしまうんですね。佐久間さんはどのように思われますか。

佐久間 私も朝から晩まで本屋にいて、関係ないフロアまでくまなく見ながら買うのが好きですよ。ただ、岡田さんは推薦システムそのものに違和感があるようですが、私は、それを使うことを承知した上で、私自身が考えて決めるであらうものと同じ推薦を受けるならば、それは便利だと思います。個人に対して最適化された情報が迎えにくてくれることは悪いわけではないです。でもそれが先鋭化し続け、フィルターバブルを起こしかねないことに問題があると考えていて、それを防ぐシステムを作るべきだと

思うんです。

岡田 そうですね、そもそも私はアドテックのような販売促進を目的とした推薦システムに違和感があるから、良いところに目が行っていないのかもしれない。でも、私は若者たちにリアルの世界の素晴らしさを知ってもらいたいし、もっと体験して欲しいと切望しているんです。本音を言えば、リアルの世界を軽視する若者には説教をしてやりたいくらいです（笑）。佐久間さんはご自身より下の世代に伝えるためにはどういう方法を取るべきだと思いますか。

佐久間 価値観を伝えるのは大事ですし、時にはアドバイスも必要です。でも、単なるお説教を若い世代にすることは、違うかなと思います。フィルターバブルの問題は、今まさに私たちの世代で認識されはじめた問題です。その問題は自分たちの時代に解決すべきものだと思うのです。というのも、その時代に起こった問題の後に生まれた世代がそれに対しての問題提起をするのは格段に難しいことだからです。たとえば、私は生まれた時からインターネットが身近にあり、インターネットはインフラの一つとなっている世代ですから、インターネットがない時代を経験している岡田さんが感じる問題点や価値観に気づくことは相当難しい場合があるんですね。それと同じで、今私たちがフィルターバブルについての問題を先送りしておく、次の世代はフィルターバブルが当たり前になってしまふ。その環境で育った世代に問題点を訴えても、理

解されない恐れがある。だから、私は下の世代に説教をするのではなく、今日の前の課題を解決することに力を注ぐべきだと思うんです。

岡田 言われてみれば、自分の世代の価値観でしか考えていないということですね。昭和に生まれて、その時代に育まれた価値観の物差しだけでしか見ていなくて、新しい世代の価値観に思いを巡らすことを怠っていたのかもしれないと思います。私は自分が疑問に感じていることをそのまま先送りしておきながら、スマホを止めないだなんて、あたかも「石器時代の暮らしに戻れ」に近い無責任なことを言っていたようなものだと、今更気づきました。

佐久間 問題意識が説教となってしまう前に、自分の世代で解決しておくことが大事ではないでしょうか。ムーンショット事業の構想も、今自分たちでどうしようかという意識の積み重ねの先にあるものだと思います。

岡田 2030年には65歳以上が日本の人口の30%超を占める見込みです。社会コストを少しでも下げなければならぬ時に、我々世代が若い人と手を取り合って、デジタル技術の導入に率先して取り組むべきと思います。我々世代に即したインターフェースを積極的に提案していくことも意味があるかもしれません。

自分ごととして 課題を共有するために

岡田 今回「デジタル社会の歩き方」をテーマ

にしたさまざまな考察、そして佐久間さんとのお話を通して、いかに私が自分の責任を棚上げして、自分ごととして考えてこなかったかということを反省しました。そして、「自分の時代の問題は自分の時代に解決すべき」という言葉や、佐久間さんのミレニア・プログラムの構想を語る姿に、当事者としての真摯な姿勢を感じました。

科学技術がどこまで進化しても、必ずマイナス面は出てくるでしょう。しかし、世代を超えてオープンに語り合い、それぞれの世代や状況に応じてデジタル技術を使い込んでいく中できつと解決できるのではと思います。なぜなら、一人ひとりへのカスタマイズが格段に進んでいくデジタル社会ならではの良さがあるからです。また、これは私の勝手な感想ですが、佐久間

さんの提示した科学技術を用いたコミュニケーションは、単に便利になることでもなく、ましてや楽になることを目指しているわけでもなくて、より良いものを創造するための進化なのだと思います。それは、ある意味、面倒な手段でもあって、リアルで、時間をかけたコミュニケーションや体験を重視する私の考えと重なる部分があるのかなと思いました。

佐久間 仰る通り、面倒なことを選択してほしい技術という側面はあります。自ら探して選択することの重要性に対する岡田さんの考えに通じるかもしれません。

岡田 人間の寿命が長くなっているこれからは、4世代が同じ時代を生きることが珍しくなくなるかもしれません。デジタル社会に4世代が科学技術を真ん中に置いた幸せな未来となるよう、私も考えていきたいと思っています。今日は本当にありがとうございました。

佐久間洋司（まぐま・ひろし）

1996年、東京都生まれ。大阪大学グローバルイニシアティブ機構 招へい研究員。AIなど最新技術を用いたコミュニケーションを研究。ムーンショット型研究開発事業ミレニア・プログラム科学技術による「人間の調和」検討チームのチームリーダーのほか、大阪・関西万博におけるパビリオン等地元出展に関する有識者懇話会委員・パッチャル大阪館（仮称）等部会長、人工知能学会 編集委員会 学生編集委員長などを務める。

岡田直樹（おかだ・なおき）

1958年、大阪府生まれ。大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所研究員。ベンチャー支援、大手企業のオープンイノベーション支援が専門。大阪ガス入社後2年目に、チャレンジ制度に応募し採用され、翌年1期生として晴れて新分野開発部へ異動。遊休不動産賃貸開発に関わった後、京都リサーチパーク、アジア太平洋研究所、大阪商工会議所などを経て、2020年より現職。事業創造と地域への定着について考察を続ける。

